

発行者
 「美紗の会」事務局
 ☎ 03-3441-2726

会主・舞台活動活発化

平成四年の動き

会主の北米公演で「美紗の会」も平成四年の主な行事を終えた。
 六月二十八日国学院大学・院友会館で催された「ゆかたざり」は今年で十回を数え、「おひさま」と共に、楽しみながら伝統芸能に接することを提唱する会主の趣旨を慕う会員・会友の交流の場として定着した。
 会主の活動を中心に、飛躍の年になった今年の動きを振り返ってみたい。
 先号で紹介した会主を囲む会は伊香保「さつき亭」の「伝統芸能と懐石の集い」が三月一日、六月七日、九月六日の三回、日立市の「西松布唄を囲む会」も四月十日、八月二十一日フアンを集めた。岡崎清女の「花垣の会」への出演も恒例となり今年は二月二十九日と九月五日いずれも格式ある米荘閣で。演目は先ず「由縁の月」「扇づくし」、九月は「菊の露」と「園の扇」。

今年を振り返って 橋場はつえ

十一月二十一日北米から帰って今年の公演は全て終わった。思えば昭和六十一年の「恋すれば唄」にお出で下さったジョン・ソルト教授の熱烈なお誘いがようやく実った旅であった。その間さまざまなお事があり半ば諦めていたのだが皆様の理解と協力で実現し、各地での演奏は、素晴らしい声の芸術、と大賞評価された。六才から邦楽を学び、様式化された社会の中で育った私の心に常にあったのは、自分の唄への追求であった。模索

しなやかな流儀を勉強したが、文一師の急逝で私の進路は大きく変わった。にもかかわらず周囲の人々やお弟子さん達は暖かく見守って下さり、離れずについて下さった。こうして西松流を継承して三年目の今年、ようやく迷いや重圧から解放された、様々な舞台を経験し、充実したそれはそれは幸せな年であった。そして微かではあるが、ようやく西松布唄の唄がうつつらと見えてきたのではないかという気がする。これまでの自分の唄を唄いたいという自我が消えて、品格のある唄、伝統と自然が融け合う唄、それが西松流の唄だと確信できるようになってきた。緊張する舞台活動を続けながらも、気心の知れたお弟子さん方と楽しくお稽古しながら、私の中の音楽は様々に共鳴しあってゆつくりゆつくり熟成してゆく……。

北米公演報告

十一月十一日、一年半の準備を経て万感の思いで出発。日付変更線を越え、先ずはオレゴン州セラムへ。
 翌十二日夕七時、セラム市民ホールで東京国際大学アメリカ校・ウィルメット大学共催の公演が開幕。一般市民と学生の家族が対象とあって出足を心配したが、二百余名を集め、九時までの二時間、休憩時間までも質問攻めに会い、布唄先生は大人気。初めに聞く三味の音に囲境を越え、法師。十月五日の花柳龍一の会では「ゆき」と「八島」を演じた。
 その他の賛助、友情出演は五月十一日「安田侃・受賞祝賀パーティ」が草月会館で、十月三日「大和松壽 舞いの会」は梅若能楽堂。深川劇場では十一月一日舞踊芸術社主催の「伝統芸能の会」に出演。その活動も多彩に華を咲かせ、北米での公演が掉尾を飾ることにした。
 邦楽愛好者への指導も着々と成果を挙げていることは、例会での会員の活動にもみられる。七月に孤々の声を上げ、本紙もこつした会主の活動、弟子達の熱意に支えられてのこと。

平成五年は西蔵、ますます飛躍の年になることが期待される。

て魅了された一刻であった。十三日は公演でお世話になった東京国際大学アメリカ校校長で、秋篠宮紀子妃殿下の叔父さまに当たられる川島教授の全面協力で急拠ワークショップ（*）が開かれる。続く十五日、デンバー経由ボストンへ、いよいよアマースト大学入りである。
 十七、十九日は舞と音のワークショップ、そして十八日は本番。この日のための二年余の歳月、いよいよ八時の開演を迎える。続々と観客が詰めかけホールは満席。楽しみに待っていて下さったという暖かい雰囲気会場に張り、一人胸が熱くなるのを覚えました。
 一時間二十分、綿密な打合せ通りスムーズに熟演が続き、誰一人席を立つ者もない。舞台を見詰める青い目、目、目……布唄先生の唄が一際美しく会場に響き渡りました。
 二十日、一行はニューヨークで解散。北米公演の旅は無事終了しました。
 ニューヨークでは、布唄先生と二人、高橋様のお宅で美味い日本食を戴き、旅の疲れを癒させて頂きました。
 最後にになりましたが、今回の成功は、百余口に上る皆様の暖かい協賛金初め、物心両面でのご支援のお陰と心からお礼申し上げます。
 （加藤 記）
 *ワークショップでは参加者実際に三味線・舞踊などを体験させました。

NJ 敬老会を慰問

感動のひとつ
 十二月二十三日午後、ニュージャージー州アルバインの篤志家大和田勝美氏の自宅で、日系人会敬老会の老人約七十名が集まり、日本伝統芸能を楽しんだ。演じるのは北米での公演日程を終えた会主、現地で合流した岡崎純女。
 演じるのは
 一、端唄 緑かいな
 二、端唄 夕暮
 三、地唄舞 黒髪
 四、端唄 きりぎりす
 五、端唄 奴さん
 それは感激的なひとときだった。非公式な演奏会であったにも拘らず真摯な態度で熟演した会主。米国に住んで益々日本人としてのアイデンティティーの証しとして地唄舞に打ち込む様になったという純女さん。
 そして決して平坦ではなかったであろう半生を異国で生き望郷の念一人のお年寄りの皆さんとがたい感動の糸で結ばれ完全に一体になっていた。
 握手、握手、握手……目を潤ませてくれる方も……。
 一週間に亘る米西・東岸での行事の疲れを吹き飛ばした様な会主のさわやかな表情。
 本当によかった。我々にこの様な素晴らしい機会と会場を提供して下さいました大根田勝美夫妻に心から感謝したい。
 （在米・高橋 剛 記）

わが小唄の記

『美紗の会』のはじまりは？

嘉本 範 男

美紗の会ニューズ第一号が田舎町の私にも送られてきました。有難うございました。この便りによれば今年第十回ゆかたざらいが開かれたことですから早や十年が経過したわけですね。

手許にある小唄関係のフアイルには小唄名曲集数冊、楽譜のコピー、口授（くじゅ）された小唄を自筆した用紙が何枚あります。

さらには、全てではありませんが、おひきぞめやゆかたざらいの会のプログラムが何枚あります。

一番古いのは昭和五十七年六月二十五日（金）十九時より夢胡美紗宅・胡美紗ゆかた会と、昭和五十八年五月十四日（土）十四時より渋谷区南平台会館の胡美紗おさらい会の、それぞれガリ刷りのものです。

話は古くなりますが私が昭和三十一年に会社に入り門司支店に配属された時代に、先輩が経営していた旅館があり、そこで定例の小唄のおけいこ会があるから来ないかと誘われたことがありました。然し若輩の身では行けませんでした。会

社の重役が来門した時に料亭で芸者衆に三味線を弾かせて唄っているのを聞いたのが私にとって最初の唄との関係でした。

時が経ち昭和四十九年（一九七四年）十一月の某日、会社の先輩に渋谷の道玄坂にあった「土筆」（つくし）という炭火焼の焼鳥屋に案内されました。小上りの部屋がありお客の少ない日で女性三人組が賑やかに飲んでいました。私は店のママさんに彼女達のことを尋ねた上でか、或いは彼女達にいきなり話しかけたか定かではありませんが、

一人が小唄を教えている女性で、一人は習っている友人、もう一人は飲み友達であることを知りました。私が習いたいと言ったのか、稽古に誘われたのか、習っている友人の女性と一緒に稽古が出来るということとで弟子入りすることになりました。お師匠さんがまだ芳紀二十才台の時でした。翌年（一九七五年）から弟子入りを約束しましたが、男性が私一人では心許ないので誰かを道連れにと思案

し会社の仲間の時枝さんと齋藤さんを誘いました。道連れといえど私達三人は小唄以外にも道連れにしたり、されたりの関係がありました。当時日劇ミュージックホール華やかなりし頃で私は時枝さんに案内されました。それが縁で踊り子達の楽屋に出入りするようになりました。トップスターは個室にいましたが脇役は二、三人の相部屋になっていました。楽屋の鴨居には何十種類ものバタフライやショールが掛けられており、舞台に出演する都度素早く取替えていました。

当時のトップスターの一人に島淳子がいました。準トップには恵あい、野々村美樹とかがいました。二ヶ月毎に演じ物が替わり、また踊り子達も交代していました。楽日にはフィナーレにファンが人気のある踊り子達に舞台で花束を贈呈するセレモニーがありました。が、何回か経験しました。

さて話を小唄に戻しますと稽古の場所は主に赤坂福吉町にあった会社のクラブでした。最初の唄は「梅は咲いたか」で次は「お伊勢参り」でした。私は音痴ですから音程の合せ方や節回しに悩みました。第一期弟子時代の稽古で録音したテープがたたくさんリプレイされないまま、残っています。

小唄は曲の情趣や人の心が滲むくらいに、力まずに触るか撫ぜる様に唄うものという気が最近多少わかって来ましたが、当時は腹から大きな声を出して唄っていました。クラブの管理人のおばさん達が障子の陰で必死に笑いを休（こら）えていたことを思い出します。稽古の後にはよく飲みに行き遅くなりました。

師匠は小唄ですが当時バストが大変張っていました。私達を魅了しました。夏の薄物で胸元の開いた装いの時には稽古の時に、口許よりはそちらに目がゆき勝ち

でした。残念なことに小唄の触り心が私には不足してました。

この様な稽古心ですから上達はしませんでした。一ヶ月に一曲はあげていました。そうこうしている内に二年目（一九七六年）の夏に私は海外勤務のため稽古を離れることになり、小唄会を続けるかどうかの話になりました。結論は折角始めたことだから存続することに決まりました。後継の弟子選びはまず多少真面目で遊び心を持ち、良き仲間になれる人と云う気がありました。幸いにも高橋先輩が弟子入りました。その後も皆さんの転勤の都度良き弟子が入りました。

板野さん、佐久間さん、大西さん、樋口さん、本郷さん、橋本さん、浜本さん、萩原さんと錚々（そうそう）たる皆さんで私共の会社から十二名が弟子入りしたことになると思います。

私は一九七九年十月に帰国し翌年から第二期弟子時代に入りますがこれも三年半程で、地方への転勤となりました。二年前の一九九〇年に一年間東京に戻りましたが昨年からはまた地方勤務をしております。

師匠と邂逅以来十八年になります。彼女はこの間邦楽に生きるため会社勤務を辞め、自己研鑽と弟子の養成に力を注ぐと共に芸の幅を拡げるため地唄にも進出し西松流を継承し着々と地盤を築きつつあります。とは大変喜ばしいことです。胡美紗さんが美紗の会に発展し十年となりましたが、会におこしに連座した一人として本会が益々隆昌するものと確信しております。師匠をはじめ会員の皆様のご健勝をお祈り致します。

『おのづから』

会主の北米公演に際し賛助金をお願いしたところ早速多大の志をお寄せ頂き有り難うございました。会員のみならず諸先輩、各地の後援者、本紙をお読みいただいた方々からもご援助を頂き、お陰様で一面報告の通り、公演は日系敬老会慰問というおまけまで付けて大成功裡に目的を達成できました。発起人としても大変嬉しく、会主共々厚く御礼申し上げます。

平成四年十二月 会主 橋場はつえ
発起人代表 木郷 公基

『編集雑記』

* 小唄を始めた年の暮、「年の瀬や」を習い感激したのを思い出す。

* 「梅は咲いたか」に始まり、「とめてもかえる」「腹の立つとき」……

* どうも自分の柄でない、と思っていた時、この唄は全く異なる感興を呼び起した。

* 十分理解もしないまま皆の前で唄い、忘年会などで冷やかされ囉されもした。

* 十七年ぶりにまた稽古に戻ることになり、木村菊太郎著「芝居小唄」を読んだ。

* 飯の姿に秘めた大高源吾の心を唄った、との解説は感動を更めることになった。

* 季節性のせい、美紗の会の「おさらい会」では演目に出てこないのが淋しい。

* 師走、またどこかで誰かが大高源吾を口ずさんでいるだろうと思いつつ今年最後のたよりをお届けする。（た）